枕草子雲隠抄

和書門
番號
一部
冊數
圖書之部
第號
一部冊
滋賀縣立膳所中學校
函架番號
圖書門
函6
段1
號763
1381
vol 7

宮内庁書陵部

作物所

細流云金銀細工乃至
拾芥云作物
所在進物所西有別
當頭熟食。時々
時柄高々神々
此の中に勘物を注
抽れたやうにして
細工人乃至時柄絵
やうにて作物
これがまにつくるまで
山々若きまで乃
まに細工共異風
思ふまで時柄の絵
をわくとそなる
たぶいしやかえる
中関白殿乃院殿
の御家院の春宮と
いもさしころはらの絵
叡景合よりかくしてまる

ほくとぶ
細流云金銀細工乃至拾芥云作物所在進物所西有別
當頭熟食。時々
時柄高々神々
此の中に勘物を注
抽れたやうにして
細工人乃至時柄絵
やうにて作物
これがまにつくるまで
山々若きまで乃
まに細工共異風
思ふまで時柄の絵
をわくとそなる
たぶいしやかえる
中関白殿乃院殿
の御家院の春宮と
いもさしころはらの絵
叡景合よりかくしてまる

そはのなりあれ　せきそたちのもりハミ　湯てミ
はねりもこしふきこゆるねミ　ろわきそそとろねミ
いきまそりすりとの　あしてれなりねミ　とろづきなきねミ
わたしげふそゆるねミ　ひつかなりねミ　ひろづしきものミ

栄花物語に云て此姫君たちを一て摂政殿をハ帝のくらひさせ給ひぬれハ関白殿と申しきまだ中納言十四にてまゐらせ給ひねなどにてまうけせさせ給ふあり宮のおとゝの…まいらせ給ひぬれハ宣耀殿いまそかりかひね淑景舎今ハすまゐせ給ひけるを…ひき…そ正暦三年のことぞ…左大臣乃淑景舎ハ…和名抄云 登花殿ハ…職御殿乃…殿…車にて…殿中関白乃…

御文などハしげうかよへど御たいめん
まだハなきを二月十日宮の御かたに
わたり給ふべき御せうそこあれバつね
よりも御しつらひ心ことにみがきつく
ろひ女房など皆よういしたり夜なか
ばかりにわたらせ給ひしかバいくばく
もあらであけぬとうくわでんのひんがし
の二間に御しつらひハしたり暁
殿うへひとつ車にてまゐり給ひ
にけり宮ハ職の御さうしの南に四尺の屏
風西ひんがしに御座しきて北むきに

せうへハ中関白殿の…貴子と申す…同三年…淑景舎…まうのぼり…そのかみ…まへ…よりてそのかへ…はしらとのもと…まゐらせ…積善寺…供養…栄花物語…法興院…四尺…摂政殿の法興院…のうちに…法堂…積善寺と名付させ給て…正暦三年の事…中関白の…父兼家公…建立…紅梅ハ表紅裏紫二月の…固文浮文…曹…固文ハ…

たてゝたゝみしとねうちおきて御火おけばかり
まゐれり御屏風の南御帳のま
へに女房いとおほくさふらふまだこなたにて
御ぐしなどまゐるほど淑景舎ハ見たてまつり
たりやととはせ給へバまだいかでか
ぜんじくやう乃日たゞうしろをはつかにと
きこゆれバそのはしらとびやうぶとのもと
によりてわがうしろよりみそかにみよいとうつく
しげなる君ぞとのたまはすれバうれしくゆ
かしさまさりていつしかとおもふこうばい
のかたもんうきもん乃御ぞどもくれなゐ
のうちたる御ぞ三重がうへにたゞひき

紋地唐文ハ唐織のごとく
こうり
今ハお梅ハきて
紅梅ハ十月より二月まで
見用の衣しどいや物
うれいまどーてしたり
んとこも二月十日の比
なれど
しきこうのあくにたれる
お梅ハ物うれて萠黄
ごしらえあくなれハお梅
をめすしあくやうなる
されどお梅ハ紅を重ハ
繁すしお梅ハこき
きぬうくわうしたれとも
こえ首尾しごきてハ濃
紅しハ紅とハうときを
なれど
さてあるりでさせ
ぬべーたれどしきあどのくくれハ
りハあくねあるりとのるすれどハいと
めでくくしさせるなるとるはぐう
やてれうくちりハいあいせるぐ物
見し他の男人も帝
うとうきひくもくやうくよしんとぐ
ゆうきさてぬるいでりせるひぬれハ
やてれいハやうぶるいまきてのぐく
をはうくめうぐうるきわぐくきこ
ぐ人ぐしてるしはたやしりひう
あきくれハとくくしゆうへハきれ

ぐるるおりくるる二月ちわ女房の
衣をおかりひきうけくくたくにちくく
ひくりかくくしかれくてれハくくしてはぐるぐ
東をしてかれくくしてはぐるぐ
足拵る。きはいこやをしはすくくしてて
南むきふれくをお梅ごもあくしごく
はきくくてくきこのやりはうぐくすくあ
うすくて。
かきすくうりをしはのうちさくく
きりくくさんりわくやのるはぐを
まくて。房をはとはくくしをりはと
いくくおよめくくくうくくとんく
中間白紙
まハ房ハう
すいくれまをくくしきの
くくはさくぬきこおりはぐくも

房りをかりはくて
紙文ハりれ礼義よる用
はのかりくるる裏を
けりりはくるはぐ
ハ無ハるくて女
房ハ裏をりこくる
おくくるや
くくさりくくのわ
うやくるくはくくなくて
萠黄りはしたりくて
りるきはくるを
あくめくくうくくと
をくくくくくくくを
りりくくくくくを

こなたよりもまさりて
今清が乃のかく古
きもさく関白殿の
いひしとし
めでたきことなりしを
もてうらえてく
左大臣淑景舎より
を関白殿よりこびえ
をかきゐし
さげいしや乃まむきさ
るやうに
うるはしくおはさし
きこゑし源氏の宮ま
登上のおうまを以
出りうきる弘徽殿
をれやうをもその
しのぶへし
せんやうでんちやうくわ殿
これ淑景舎より登花
殿へゆくみちなり
宣耀殿は和名云[illegible]殿

直衣のそれひかんとけ[illegible]
はひめわくびさう乃柱もとにて
おくごとごとにもさくれ
ますめでたきことおほさるも
奥まも[illegible]
えそぐれいうそうれにうをせさせ
まふさげいやの[illegible]かきしるやう
うほうげわくぬきせなへるにも
やもうのふいますこしおはさむ
つるはげさぶ乃后ぞに句ひおそ
せたいくわうぞひそいそでしるみ
まふはてうげまいる御[illegible]せん
土日の弘の后[illegible]を進しみ
でんちやうぞでんをさをんくわ
二人さくもほく四人さうくまで

乃ふにけり 貞観殿
和名云常寧殿乃[illegible]
おりこれを后町殿と
いふし淑景舎は昭陽舎
乃小麗景殿乃うしろ
にあれば西宣耀殿
をし西貞観殿とも
まてこの登花殿
おくべし今の后も二
らひ登花殿乃東の二
間とあり 掖庭乃官
帷乃帳 和名[illegible]
都へし
わきさね 和名云背子
形如半臂無腰襴之袷
衣也 褙子漢語抄云背
子婦人表衣以錦為之
小野の三位 菅原輔正
勘解由長官在躬一男
現神に北野殿是也正暦

かくびさし乃こなたなる小女房六
人ばかりはゝふせなどしてかくへは后
さくみなからうかり桜乃かざしさし
ぎこうぞいおでしみじくかざみなく
さりひきてぞうはぎまの[illegible]
あるめりしなりの[illegible]
出でうすいきさ乃もあれとも
が将乃きみ小野乃三位のむすめ宰相
のきみしあかうちくいはるなる
どみなるれうりこれはさみはてうつ
くみ乃うねめあをすうみごとかつきね
ゑんさいひま[illegible]

三年二月十五日叙三位公卿補任大系図等三位
清少納言乃ちねめ
百寮訓要抄云采女ハ
中ハかさしかみあげ
をそへて天子へまゐる
する也陪膳
ゆるさるゝ女房とまこ
清少納言乃後とても
こゝろうべし
みくわけまゐりて
河海云昔ハ女房之叙
以下常に髪を上ヶ
幸義代也也足軒云内の
女房ハ昔乃内ハ髪上
とて叙ラぐし女嬬
ないしのすけ上るとし
女官乃…
人まで…

しろくてたゞはなやかにさゝやきて
まゐりてどこれはさもやけにふかう
めづらかにおもしろし
みぐわけまゐりて女房人ども
のかたはらくまゐりてすわりて
てかへる屏風もおしあけつれど
かはきよりみな人みな上とれたる
ちかくまゐりてゐれば
ちやうどの中よりて柱のもとより
見なするきぬのすそ裳など
ましてまゐりたまひける
殿乃むしろにはらんし

かしこまりて
清少納言の方を見やる
のおまへに御前に
まいりたまへる
れ給ひけるをかしう
かれにおぼえて
右得意也清少納言
よろこびて
さやうのこと
にやありけむ
の直服
けるを
猿楽言也狂言乃
ことなり
大納言殿　伊周也正暦
三年正月八日叙大納言
納言にて大納言
三位中将　隆家也
為光四男
乃君の…三位中将

関白殿の御前
とまりやまゐりて見ゆるとぞめでたき
めづらし納言が物ゆへ
さしすぜ女房へはおましにわれもおまえ
とくいはれてもとめる
まことにこそありけれ
さきにわかうおもしろく
らやむしくめでたくみかへりける
くきこゆるやうに女ほあやう
よもすがらのぞき月ひかり
まゐれど大納言殿三位中将松君を将
まゐりて殿の御前ことにさもこそ
てひきすゑさせたまへるをうつくしうぞ

あしきことの門にとぞ
こと正暦三年のこと
書云　伊周ハ此男大家
大史道雅の童名也
堀川右大臣…乃姫
左大納言殿…
きこえし…
わかれ…

きこえんよおほせらしひ乃徳さうゝくの下
なさねばひきしかしくされたわか大納言殿も
おくきふきこげよ中将殿ハらかく玄ふハ
ほれとめでさきを見なるに殿をばさる
よめゆくうへ乃徳すくせうめでたけ
東達わくしこあしけしかへぢちんよつき
侍んとてハうきしうちあひねと出しるを
て式ア乃世すあわりしこことやハ徳使より
まいりさればおとよやどわ乃中よまいる
頼君まきとねさし出てすへわ徳具
久ハとくとさせりんかまこえをねも
こりられねけり。東宮乃徳使よちか

わたよの　徳殿御かし
…

よわ乃中将まわさわ徳久とおハれてわ
さよのもゆるきこえんあれバこゝろもあえん
に玄とけ出てわ徳久とわいわとく殿
うへ宮あよ徳らんしわてさす徳五をや
あどわれこどとくかときさすゝかくなぞあ
げかなく侍れどもよあそれねなかわ侍りねわ
ハやまもなくしてとわけかけしまつるあと
やさへバ徳おまてハすくしはゝわならす
こうちにてえみまいてるにとあそてうしとく
あどうへもきこえてまへバたくさふむもさ
てかくせすかうへらくよおまひてよるも
なかりせなかわまへハいとて侍わかけたや

こそれ作者なりとてひさ
ぬこんきわろくは侍りし
后宮乃皇子うまれさせ給ふを
まこれ宮しれ給ふをそ
うらみてわらづやうり皇
あたり出まふむしとこれ
長暦年二月これは一品宮
勅康親王ちろもやまつ
れさせ給ふねがつし
えんまつまゐつきと
遊道まうし事もし給ふ
てうは出家道々まうでくとき
一条院乃后宮の法事く
入道乃さるく
よろしくこちこにけらせ
殿ゆうての法がある
まうく帝乃おはします
かうつやわかまる

宮乃法てこゝわらはされもかの梅の小袖
ゆるしつ出させ給ひれども二位中将のつけ
みそれはりわらはうちぬね給ふの
たるう梅の事を誰もくらうつきわ
きらへのよまか修よさらにくし出
さんり見てゝは侍りしまでのあと
するをげりあらふの人のゆくく侍るすの
とう心もとなきこゝつ乃時いらわよえん
こうまつりと申ふかしもあくららそよぬ
きいつせすへいぞゑとこあさよしせ給
ぬやさしく法帳りいつせすへいねれば女房
南かまへりうよめきぬねわらう

殿の侍すへつまあつき給
て中宮大夫のかれ宮
りし事を着ちてのうす
侍従く殿上人を見え
あせとてゆうて
山井大納言　道頼也
後宮伊周公の前殿
の兄也。山井殿は三条
院門乃妙本道の病
あつりし給坂出えわ
永れ乃三位の家
華むは後三山大宰帥
いまさかわう人の
山の井といふ所にすむゆ
むとめなわる故事
成すひねまいふ大宰帥
といふ道意へなり
みうちきとうつせられて
知家宮にらいふみつ
きえ人のうてかたせ給ぬ
あさし河海云後ゞと
人のはすてたまる云竟氏

殿上人とかわら殿乃侍すへつまあつき
めりて侍るの法のらめきあつ人ここちせ
あでかしをせゝるやまうとにみなおひく
女房を指らひくすれもへにわり
おりひさわ月乃人りかりたちこそせすひ
て山井の大納言めしいれてみうちあまへ
いつせすひくれてせすの桜乃法あるな
に紅乃法すの夕ぞへあさぞめにこゝれ
こゝめ山のみ大納言いりて梅法
せうとふくゝとしてくもとし給ひ
やのあるさゝ山大納言いりてなりかへ
よのみ世ゆ人みせちはいひあさ

私記云御髮御髮事
侍臣之間相撲節之人
供奉定所 皆着當色
絶調之御袴 人衆
うちうちにはひんなる
人はなのきぬの直衣を
まして 相撲をとる
ちまの人どもとも
内裏に 又 道隆卿
ほうこう 頼親の間 為
こ 為 家 園 うあり
ひとみ 内侍のすけ
たる 権頭 時明の女
一条院 御代 を 経
ぎて 日本紀を
こまうとうれと
のまうけと 好 て 或
と 日本紀の 屠 と
人 也 所人
おのの 名 わ
ぬ

おの 花の 庭 を
ふ こ
大納言 こ 伝 乃 中将 内 見 ひ
ま 文 の ぐ せ 上 べ き 陪 徒 て む れ
内侍 乃 す け ま り ま り こ ど ひ い え ど 志
ぎ ま る を 殿 き う せ 給 く ま と お る ま
う す や の ぐ せ ま へ と ま さ せ 給
文 者 宮 乃 陪 つ の ひ ま わ る 給
ま ま む ま 女 房 ま 乃
い と 陪 て
ま す れ ば ま り と も い で と お る を 牧
ま ま の 所 り き こ え ん あ と の ま い る わ ど

ま ひ て ほ ま 陪 文 い あ の
ま り ん と
陪 り と も い え る
陪 し ま ま ま ま ま ま ま ま ま
ま し 陪 文 の 礼 讓 也
う ち う ち う ち し
内階也 細流 ち ち す 殿
う 牧 を う ち わ ま ま
ま ま る も
殿 上 ち 内 陪 長 年 六
あ の 陪 う ま ま ま け ぬ
ま ま く ま ち う ち う
朗詠 大庾嶺之梅早
落 誰 河 粉 糊 これ く
紀納言 長谷雄 乃 詩序
乃 文 也 イ 本 お 陪 ま で
け ま に ま う ま ま
内階 ち と ま ち ぬ ま ま
ま 金 ま れ 早 ま ま
う ち ま ま ま ま ま

い と ま ま ま ま ま ま ま ま ま
ま ま ま ま ま ま ま ま ま ま
殿 ま ど ま ま ま ま ま ま ま
ま ま 殿 陪 乃 ま ま ま ま ま
ま ま ま ま ま ま ま ま ま ま
殿 上 ち 梅 乃 ま れ ま る ち ち る 牧
を こ れ い ま ま ま ま ま ま ま
た ち う と ま ま ま ま ま ま ま
う ま ま ま ま ま ま ま ま ま
殿 上 人 ま ま ま ま ま ま ま
ま ま ま ま ま ま ま ま ま ま

二月ばごもり
そも〳〵正暦三年の比なるの
時と思しきよりや
めうして作つて有給
ひくのごとそらの目年
あつらへまいらしとも
公任の君宰相中将殿の
公任と宰相中将殿と有
人のそこせの事とりて
公任は将ば相国頼忠公
の男和漢の才人
宰相中将は殊勝てつや
すこし春ある 雪をぞ
除世てよき花の色
此詞を互て懐紙て興
ますますもなきりて
彼は是をも封ふ
誰こそとへばそれくと
此連歌にて一席の
人々を誹るがゆへと
よくばかくとうやく

まくらのさうしにつれ〳〵作らる
二月ばごろは風いたうふきてそらいみじく
くろきに雪すこしうちちりたるほど
黒戸にとのもりづかさきてかうして候
わきていへばよりたるに公任の君宰
相中将どのとあるを見れば懐紙に
すこし春あるこゝちこそすれ
とあるはげにけふのけしきにいとよく
あひたるをこれがもとはいかでかつくべからん
とおもひわづらひぬ誰々かととへばそれ〳〵
といふみなはづかしき中に宰相中将
の御いらへをいかでかことなしびにいひ出ん

おかよのくるかう
帝の御心もなく無実
の俊賢うつし
わすれとて 他言
さしひかへされ
こうわかくれ
そうさしみ 花
すゞてある雪をご
それすぐしまゐるべと
おもしろくて
うられしかさ
内侍のはきさらして
給まてかはきうる
人ならしよの
どうしての中将
源俊賢て西の大参
高明公の男
左衛のかげ 誹と不
事らてこの定

こゝろひとつにくるしきを御前に御
らんぜさせんとすれどもうへのわたり
ましておほとのごもりたるにとのも
りはとく〳〵といふげにおそく
さへあらんはいとゝりところなけれ
ばさはれとてそらさむみ花にまがへて
ちる雪にとわな〳〵かきて
とらせていかにおもふらんとわびしこれ
がことをきかばやとおもふにそしら
れたらばきかじとおぼゆるを俊
賢の宰相などなほ内侍に奏して
なさんとさだめ給ひし

恋賢民意集作かや
よ日乃さうし
法嶽粘進ちて云や
ろんひろでひれわ作る
秋名云半碑 衣あ造
桃与薬葉を 画物云
近代以碑以より繍結
是往古之例以大繍二
節結是今世所長入之
外素今業虫土繍と
ひふもわり名ハ綾要
八生乃穀を田ゆ続ハ
詞ともんをしてみるく
結之といへる事のするを
あくりとも してあくく
十二年の山ごもり
は撰の詞も今もをおくい
すきひろ 源方弘
たる権ノ時明寫お注

中将ありくかいせられるやうかるよし
ありける時
よ日乃ゆかうじうちむける日 そむ人乃
とひれわちごもる日 みちれ玉へ人
乃おふ坂乃関こゆるかぞ うかれ出る
のみちのりあるかぞ大なんかや経
詩経を八百巻と結
法ともやうひとわたくしよみりしも
十二年乃山こもりてのめわる日
付とそうが但馬紙うそるハ往古乃大結二筋をとりて
かるべしぞをひねふ違へる旋なるや今世表へ入れ
書よみ例乃ひの
すきひろハいうしくてわらひて
おやあそいふまくらんともにあるまく

あまりつるとあふ
てはりくてず人ふ
りて矢りて方弘を
いゑずつかりてずとし
人おわらしてやまる也
是本さまするど紙燭
乃つけやさきおる
これはとも人もとなり
そハさる人はきかせりや
方弘りわ似合ずまこと
おりてりて
里ているのちふうた
さ 若菫た
下宮亭へ移れ局元
りやるるへし
ひとまきすぢめり二ま
すへりるや 一条大
へき瀬り三森ハり
じどし一人ちて二人
の為ハえらうかうしを
瀬ハ方量るあうぬわり

まのもいと人ぐちきぎをよいへよせてあふ
方弘が供を二人このよし
ちふわてなよのそ傳りかすとろず
深縫
おかゆるあむでわるふぢのいとうくするか
方弘が注楽出
いふみをいかさねり名ぞ人乃きぬ
あどもと人よかはりくてきつるまでぞ
なこと人ありきさ世ぢやあていふめり
方弘がことば
ぐふそ頭つひちよのおやちとき里
まらみぬ稿さうりまやるる男二人
方弘が詞
さりふまひわちくとりにかうわらん
男の詞
よのあさいふまおやし乃男や一人
方弘が詞
ちとくふわ乃ちよの色ハうでまれ
へきぞひとまずがめよ。二またすれる

人のむすめのうちとけたるも事もなくきこゆる
おさなき数ならぬも
かすみたるやうなるへきもの
せちなる事のあるましく
ひとりふすや
山殿上のすみかしては
絵ありけるかんしよく
普賢の御名かくれなき
とりいふかや
女院 あやしき事也 是東
三条院也 一条院の后
女 おこなひ
なつかしきひとのある
宮の侍るかわかの侍
なき人の独言 言弘か
おもしろきも
さていはんや人もやう
これはたゝ退出の人
おかしき事を申す
あまりなれは笑ふ也

やことなき事とさへ人のうはけ
まてこらしうわかへ人のつひろ人のまそ
侍る事もてこにはをおもふにの男
やかたにはめやへくる山殿上の
すこ草はうのねもかくる
ふいるさけあつさくつら土そ
人のねともやいふを人わ女院
あやしせのみていて侍の使りおいて
山てるるりの女院の殿上人はされくる
はかつるさ人のへはられある要
人もかりいふ人はしらへもさせて
わるへともすかりつるといふも

人のまゆはわかきし
人のちかきにも言弘は
かのさふまても
ひろこめは 蚰蜒
金身のこころちより
まきの如し
ちさくの中の衣
陰月も三ヶ月を
あかそ中の衣し
おこ香油
とうさいのうらきさ
蛇壷の下に三て抱
すなわち油単し
はなうきつれ
油単小言弘か足を
つけなうそれなし
さうの門 和名 襪 亦作
一 襪 和名之太久頭 足衣也
桃花藥葉 襪 練子

わろきもおやしき事はあらはれ
人のなりよりおきそわか天こそちかひ
もことえんすし人の心のまかする事なと
又はれすみのもてきちやうのうちに
よそわされはむくろこのよわきへと
いふをあさいこめいとをんひつさと云
てわれふちくの中の紙さしかる
らすそうとうのうちの土さきしたく
てそそてはのきさゆんされ
はようそへられはそわさうのゆりて
かつれなもやのていさいそうつれぬ
ちまうてうち土きはきそゆ

乃小袖を着たる時も練貫生絹の肩ぎぬも白きを平絹乃ねりわりかハ大方ハうるしぬりのくつを用ゆ頭つきなども取れ侍る也
老人頭ハ黄毛を殿上の笑顔とする事ハ真盤の上まで着たる事ハ殿上人のほうのやうにハみえず
さつきたぬ事を言ひあらはしたるを見てよろこびたまふとぞ
あふさかのせき 近江 逢坂関ハ相模より武蔵へこえる関なりと
すまのせき 摂津 須磨関ハ摂津の国の関
くきたのせき 伊勢 ぬのゝせき
しら川のせき 奥州 陸奥の関
衣の関 奥州 細谷関ハ
たゞこえのせき
ふしのせき はゞかりのせきとも

まさなりたることこそあらめ とうらやまし
頭はなのしねりとも 殿上乃大らん
わりへとはすぞかれまさきひろハまは
ひとりわをとりうくさにちうじ乃うろ
あそやみくひれバひきたり
てわるそてるすうかきやあさきや

せきは
あふさかのせき すまの関 すゞかのせき
くきたの関 しら川乃せき 衣乃関
たゞこえ乃せきハ はゞかり乃せきとた
としへなくこそおぼゆれ よこはしりの関
きよミがせき みるめの関 よしよしの

せきこそいかに思ひかへしたるらん
といとしらまほしけれ それを なこその
関とはいふにやあらん あふ坂などを
さて思ひかへしたらんは わびしかりなん。
はしりいで せき

もりハ
おほあらきの森 しのびの森 こ
ゝひの森 こがらしの森 しのだの森
いくたの森 うつきの森 きくたの
森 いはせの森 たちぎきの森
ときはの森 くるべきの森 神

うつぼ 陸奥 なこそのせきハ
とよ ふかくおもひかけたる
ことのたとへとなれり
八雲にハ逢坂を
逢坂の関とやいふべきとぞ
ふたらの山のかたへとあふ坂
集より頼朝卿
かくれなき所なり
おほあらきの森 大和国宇智郡 山城にも
しのびの森 未詳 陰奥
こひの森 紀伊
こがらしの森 駿河 陸奥
しのだの森 和泉
いくたの森 摂津
うつきの森 未詳
いはせの森 大和 又摂津信
たちぎきの森 八雲に未詳
ときはの森 山城
くるべきの森 未詳

神あひの　神南備森と
佳き今かうなへといふとし
こひのもり　本寺
こゝろの森　山城乃末
情りやて郎くいはる
本まりて
卯月つごもり　元わ
例乃筆すさひ
長谷寺　拾芥云今建
二丈六尺十一面と
於元亨釈書ニ有
泊乃わたり　古ハ樋て
て舟泊りせし
頽のわすれ古迹有ハせ
都にて泊のわたりは
しやと信牧の事し

あひの森　うつてねのもり　泉田山城
もり　うへ木のもり　いもきの森　あり
まそ乃森といふなくてさするこそいとかしや
しられもりあてやつかくちからずとも
ひと本はなをはりつかはすや　こひの
もり　こゝろのもり
卯月乃晦日ちかき世寺なりしつでに
泊乃わたりといふところをすぐれば舟に
車をかきすべてゆくに赤さうぶこもと
あしの末いふくちいさやかならぬかりけれ
いとおかしくみゆるこそはいとめでたし
わるきこそうしろめたけれ

さやうかうも思ひて
文選六二謝霊運　蘋
萍泛沉深　菰蒲冒浅
清　金葉集あやめ
こりもやかくさきのかの
いその浅香の沼のはなかつみ
かつ見る人にこひやわたらん
六帖本　三乳抄云
の沼まかつみのうる
も稀と云ては見え
こゝのわかりけり
湯　温泉乃事
博物志云凡水源有石
硫黄其泉則温
七久里湯　八や佐よ信濃
志らの湯も同じ
物のねは　元三
曉乃筆経と　寺わ
云々

河内国也
かくせのよかるこれをよふにかみよ
どえもしつ三日といふはゆるのあはれ
まじう隆しのはかなふかきて笠の
いとちいかさこをきてすゝきて　足踏をつかねて
おのこわらはのおよのするも屏風乃絵
うりいとよくみそり
湯は　扶洛　本寺
あくりのゆ　ちかたの湯　玉つくりのゆ
湯
津のねはわをしらせる　きこゆる鶴
元三乃車のおと　鳥の声　あくのき
乃さそのおき　物のねさらなり

あでしこ　イキ山でう
さうぶ　ゆり　菖蒲
ゆでうりふめでしこと
和名抄云　ヲミナヘシ
楊貴妃の形ハうつくしき
姫とぞ　ものゝ張あれば
いと白ひろく狭き
あさとゆ　ゆ
おさまるまつ　ゆ
ちりとゆ　ゆ
ちるも　ゆ
松の木　そしらも　鹿なでハ
ちるもちるもあるもし
そハ　そ　ハ
韓退之詩　肌膚生鱗甲　衣被如鎌　氣寒毫莫嗅　血凍指不粘　圍
炉不覺煖　熟炭屢已添
衣ハ　ハ
ちるもあげ　ゆ
梁元帝詩云　李夏煩暑　流金爍石　今ばき乃
土さえ　さけ　ゆ　ゆ　ゆ

やつれて春ゝの山ゝ
霞衣ぬぎすてゝ
[illegible]
と金峯山の霞もと出
[illegible]
[illegible]
あをやまき
桃夭葉衣色更新
春山映　春色裏黄
山衣二月も用ゝ
[illegible]
[illegible]のよのもの
[illegible]
長保三年荒人年荒
三条太皇定方より
五代史馬作宣者の
[illegible]
すいん　桃夭葉衣云
水干事紗ゝ也縫
[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

二十六七日　とうだいの
むかのうらうらして

年ごろすくしする
年をとりてし
朗詠　青火一炉灯
一盞　白頭老礼佛
經

いとかしこいかるれば
一紙をも書く家の
蒔絵をもとめる
ゆゑなり

寺ごとにこもり　三井寺
りやうぜんの

色女もきたげあるべくかき永きて
二十六七日ぐわつのつきよ
てぬるくれば
たげある月の山のうちくてく
こいとおつれあれ　秋の野　年ち
すくしする　ちりをこあひたる
あれる家むぐらひてよもぎ
あどくなひる庭の月のかか
くあきいとはふかねの吹
月寺ことわるいくく
雪ぐりおくくおりくれぬ
のちねきくきまるいてわり

ふれくく　博陸
初陳ゆる
うの紙伝云楼
のうりかまぐきれの
ふれくくいかたの
まをくくはかり
ドちはくくの源
くくゆぐく伝
びぐちくく小神
年いかの中て衣きぎ
れやりの八月
ひくくく
てくもかくくのて
ちくもかくくいの
くつぐとくくは無恵
ちあやくきけがしき
俱今乃ちゆ
大蔵経綱目指要録七云
俱舎頌一卷　天親菩薩
造也説一切有部作八
品也分別界品第十四頌

ふれくく　博陸
初陳ゆる
うの紙伝云楼
のうりかまぐきれの
ふれくくいかたの
まをくくはかり
ドちはくくの源
くくゆぐく伝
びぐちくく小神
年いかの中て衣きぎ
れやりの八月
ひくくく
てくもかくくのて
ちくもかくくいの
くつぐとくくは無恵
ちあやくきけがしき
俱今乃ちゆ
大蔵経綱目指要録七云
俱舎頌一卷　天親菩薩
造也説一切有部作八
品也分別界品第十四頌

二分別根品七十四頌。三分別世界品九十九頌。四分別業品一百三十一頌。五分別隨眠品六十九頌。六分別聖賢品八十三頌。七分別智品六十一頌。八分別定品三十九頌。已上六百頌為論之本也

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

経をしゑるゝ法師
[illegible]
[illegible]
[illegible]

いとけなくさいし
進退せ舞れのうた
あるをとりくそうろう
ひいるるを

はるくとあまさ
そいはなるしの人の今
ゆるるを

たんさいしてみるをくるくるとさく
ごとれたぴぴはぐねうしくくしたせ
きてまさまれをはくくとくるるを
ぐいくくしたはけるるはやすげるを。
牲よくくとあまさおるてだるるち
る人乃はやくくすたのひやうる
ほけるひはくくぴるる人るはんぴの
ひはくくぴるる事せいせるあで
うらおやくくはは乃事せいせるあで
はるをあるるぴけはるはるるあで
乃あはぎ毎ぎうぼさおごるるを
はくくはのはくくはのはくくはのは

[illegible]

園遊せうの事 [illegible]

[illegible]

[illegible]

[

於夢中見大金鼓
こうちゐる仏まれに天
地の声をおせんとて
圖書金鼓をうち
又唄師音聲を数
せんとてし金鼓を新
まれば其年十三なる
ゑんでのハ十ゝ
ゝ方ゝうハ人ゝ分れて
ゆゝゝふゝゝ分ねし
我とハいつでもゝんと
すゝゝゝ例ゝゝぬ不
寺ゝゝゝゝゝゝ
常ゝゝぬ不ゝ
どせんゝゝ我一人
るハゝひゝ同一
女ゝゝゝゝ
ありゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝ

うけこうちゐれ。ぼうゝと又ゆる
人あれどよいそでハ十ゝ
ぬゝこゝ
多を又せ
やうゝゝゝ
不ゝゝゝ
ちくこゝ
ひゝゝ
あゝせつ
ゝゝゝ
ゝゝゝ
ゝゝゝ
ゝゝゝ

かやうゝゝゝゝ
ざゝゝゝゝ
くゝゝ

心つきうきゝ
ゝゝゝゝ
のゝてゝゝ
ゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ

こうゝゝ
くゝゝ
ゝゝゝ
まゝゝ
ゝゝゝ
ゝゝゝ
ゝゝゝ
ゝゝゝ
ゝゝゝ
ゝゝゝ
ゝゝゝ
ゝゝゝ
ゝゝゝ
ゝゝゝ
ゝゝゝ
ゝゝゝ
ゝゝゝ
ゝゝゝ
ゝゝゝ
ゝゝゝ
ゝゝゝ
ゝゝゝ

[illegible] 雨露ひ
[illegible]車をふむ乃
[illegible]西[illegible]
[illegible]
列子云 [illegible]有食者
常乞於城市 乞児云
天下之厚奠過於是

おがさず。ぬぐらう共合の人などふ
とのきくる人よわけすまくしも
おまえ乃ぞ[illegible]ぞうらすぞろ
[illegible]えーわれさしづる
わひしげうえゆる
六七月乃むしあひ乃時ぶうにあて
あげるまる車ーうるせ半乃けくゆる
ぶゆくの面ぬ日そうむしろ志
[illegible]る車 [illegible]る日そわむしろでぬる 年
きくるい保とはひきおりを見き
あもげを女乃ものはきるをひ
[illegible]る ちいはきの板屋のうろきそ

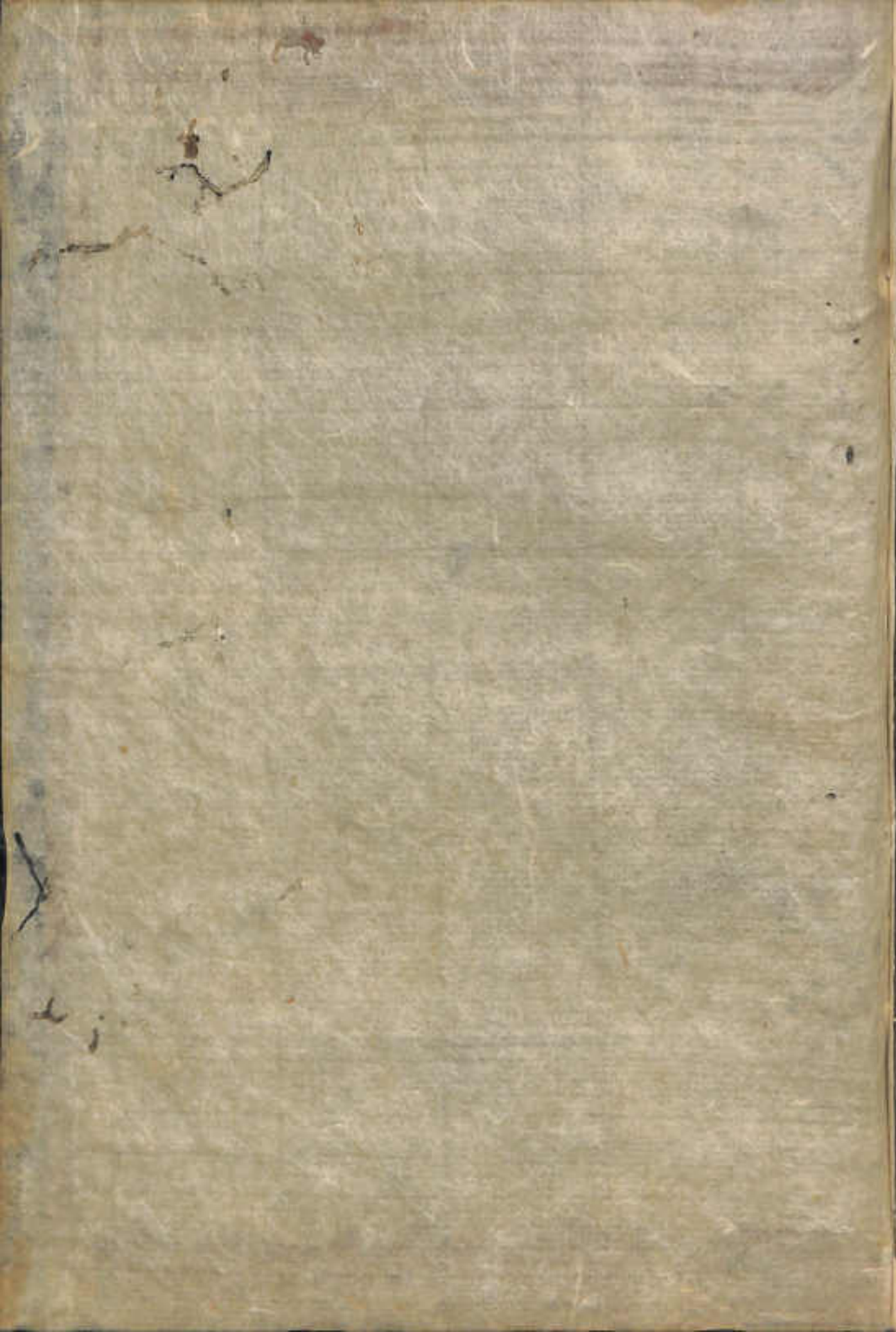
和名抄多年
ぜんくそる お陸
[illegible]のうく佐[illegible]
[illegible]
すいえんのぬさ 遊宴の[illegible]
長し 懸翠[illegible]を遊宴[illegible]
[illegible]上蔵に当ちとふ
素民下元民也 人[illegible]
[illegible]ハ褐衣
冠ハ 袍衣を[illegible]
[illegible]時ハ 依て出[illegible]
のくの乃けさ
納 袈裟 [illegible] 和名云俗云能不。智度論云五七月白[illegible]
袈裟 和名袈裟 天竺語也此云無垢衣。又功徳衣俗云加佐
てぬのめ將 出居次將 賭ちのくる[illegible]

[illegible]ぬれる 面乃いくく[illegible]る日
ちいはきて[illegible]のうくぜんくそる/の
なうもひげ。袍も[illegible]もひうげ
[illegible]ひうくとえるわ
けをはれよ
はつ者[illegible]
ずいえん乃[illegible]ぬのくけさでぬ
乃ゆ將いくぐこてる/乃がこかうる
きんのうて六七月乃ずわくの乃ぬぐち
[illegible]とこうふ 又[illegible]氏の湖乃ぐ
月中の時[illegible]

[illegible]ぞ[illegible]八月の最勝講七月の相撲節[illegible]出居次侍玉座の
[illegible]河海云 装束の器皆[illegible]出居八座敷上[illegible]
[illegible]修法阿闍梨[illegible]讓麿[illegible]
[illegible]和名云 鍛冶[illegible]
七月[illegible]八[illegible]

[illegible]

[illegible]



春曙抄六終